

令和元年6月28日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02975

研究課題名(和文) 英語学習の動機づけと学習者の認知能力を高める小学校でのCLIL教材と指導法の開発

研究課題名(英文) Development of CLIL teaching materials and teaching methods in elementary schools to motivate English learning and cognitive ability of learners

研究代表者

酒井 志延 (Sakai, Shien)

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：30289780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：(1)英語学習初期に、学習者の英語学習の動機づけを高める研究と教科内容言語統合型学習の日本への文脈化を図る研究に関してだが、小学校での最初のアルファベット指導が、学習指導要領上、国語科でのローマ字指導で、しかも、指導時間が4時間と少なく、ほとんどの児童が、未消化である現実があった。他教科連携型で、国語、書写、図工の授業で、各教科の特性を活かし、10時間確保すれば、かなりの学習者がローマ字を習得することが分かった。(2)小学校で実際に英語教育活動を実施されている先生と共同で研究し、学級担任でも無理のない、外国語指導法、教材、評価法を開発することであり指導法及び教材には2冊の本を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多様な研究者及び実践者と協同研究により、小学校教育現場で研究を実施し、小学校外国語活動における効果的なリテラシー指導、小学生目線の実践と小学生目線でない実践、小学校外国語教育の定義、小学校教師の授業創造力からの視点、小学校英語教育におけるLap Bookの指導と評価の試み、教科横断型授業を利用したローマ字指導チョコレート・プロジェクト、チョコレートから世界の現実に目を向ける力を養成する外国語学習を研究し発表した。

研究成果の概要(英文)：(1) In the early stages of English language learning, with regards to research that enhances the motivation of learners' English learning, the first step that is taken is alphabet instruction in elementary schools is Roman letters. For instruction in Japanese language lessons under the Course of Study, the instruction time is as short as 4 hours, which is considered an insufficient amount of time as most children seemed not to acquire Roman letters. We found that many learners could understand if they learn them in other subjects, such as the Japanese language, transcription and art. By doing this, these course can take advantage of the characteristics of each subject and secure 10 class hours.

(2) We researched jointly with elementary school teachers. Our purpose was to develop foreign language teaching methods, teaching materials and evaluation methods that can be used by classroom teachers. We have published two books on teaching methods based on our research findings.

研究分野：小学校外国語教育

キーワード：小学校英語教育 小学校外国語活動 異文化理解 テディベアプロジェクト ラップブック

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在の日本の英語教育の現状:教育学では生徒を成長させることを課題とすることが多い。しかし、理論に基づいた実践が行われているにもかかわらず、英語教育は成功しているとは言い難い。それを示す結果が文科省調査(2015)で明らかになった。高校3年生の英語4技能に関する結果で、CEFRのA1レベル(中学3年生相当)に、読む力では、73%、聴く力では76%、書く力では87%、話す力では87%が該当した。つまり高校3年生の70%以上の英語力は、4技能のどれをとっても中学3年生レベル以下と言える。大学進学率が50%なので、上位の50%の高校生が大学に進学するとしても、少なからぬ大学生が英語リメディアル教育対象である現状を裏付けている。

(2) 現状への対策: 学習の始まる小学校での英語教育で、動機づけを高めることと認知力を養成することが重要と考える。その理由として、清田はリメディアルの大学生は学習初めの段階で英語学習にうまく対処できずに、そのまま苦手意識を持ち続ける(2010)と述べている。研究代表者の酒井は英語が苦手な学習者の特徴は、英語学習に対する認知力を発達させていない(2010)ことと、英語学習に対する意識が、頑張ったらできるようになるという努力帰属から、能力がないからダメだという能力帰属に変わっている(2012)ことと述べている。

(3) 欧州での外国語教育: 欧州のEFL(英語非母語国環境)では、従来の英語教育に加えてCLILの指導の普及を図っている。酒井は欧州諸国で小中学校の授業を観察したり、欧州各地から集まった先生たちと共にセミナーを受講したりして、情報を収集し、担当している先生の英語力レベルや授業内容を分析した結果、日本の小学校にCLILを適切に文脈化できるし、そうすることが、英語ができる日本人を増やし、また英語が苦手な日本人を減らすのに効果的だと考えるに至った。

2. 研究の目的

(1) 英語学習初期に、学習者の英語学習の動機づけと学習者の認知能力を高めるCLIL(教科内容言語統合型学習)の日本への文脈化を図ることである。

(2) 小学校で実際に英語教育活動を実施されている先生と共同で研究し、学級担任でも無理のない、外国語指導法、教材、評価法を開発することである。

(3) 小学校の先生が、指導しながら、自分の能力を向上していくことが可能な、授業力効果上のめやすを策定することである。

3. 研究の方法

小学校の専任教諭、指導アドバイザー、小学校英語支援団体などの小学校外国語教育とかかわっている人材との共同研究による。また、研究成果の普及のために、小学生の文字指導および発達障害に対する指導のセミナーやワークショップを2016年度は東京で2回、2017年度は東京、大阪、名古屋、京都で計6回開催した。2018年度は東京と大阪で計3回開催した。

4. 研究成果

研究目的の(1)に対してだが、小学校で最初のアルファベット指導が、学習指導要領上、外国語での指導ではなく、国語科でのローマ字指導であり、しかも、指導時間が4時間程度で大文字と小文字の学習を終えるようにくまれているので、時間が大幅に不足し、ほとんどの児童が、ローマ字を未消化である現実が明らかになった。本研究チームで、研究したところ、他教科連携型で、国語、書写、図工で、それぞれの教科の特性を生かした授業を実質10時間確保すれば、かなりの学習者がローマ字を習得することが分かったので、その授業報告を実践記録としてまとめた。

研究目的(2)に対してだが、研究チームでまとめ、指導法及び教材には2冊の本を刊行した。1冊は2018年7月に刊行した『“先生”のための小学校英語の知恵袋』(くろしお出版)であり、もう1冊は、2019年7月に刊行予定の『小学校の英語授業をデザインする ワクワクした授業を目指して』(大修館書店)である。評価についての研究は、阿部志乃(2018)「小学校英語教育におけるLap Bookの指導と評価の試み」、『言語教師教育』、第5巻、第1号、115-129.がある。

研究目的(3)は、酒井が研究分担者である基盤研究(B)(課題番号:16H03459)で、小学校の先生のための授業力向上のためのポートフォリオであるJ-POSTLエレメンタリーの研究に全面的に協力し、小学校英語指導者のポートフォリオ(略称:J-POSTLエレメンタリー)を完成させた。

また、ワークショップで寄せられた外国語活動における疑問や回答例はオンラインホワイトボードツール(Padlet) <https://padlet.com/pearlsofwisdom/92i2tojjas8z> で公開している。

研究チームのその他の論文には、

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

- ①土屋佳雅里(2019)。「小学校外国語(英語)教育とローマ字教育の考察—外国語活動と国語科ローマ字学習の連携を考える—」,『上智大学短期大学部紀要』,第40号,pp.57-72.
- ②酒井志延(2018)『日本における複言語主義の勧め』LET Kyushu-Okinawa Bulletin(招待論文)No.18,1-14.
- ③酒井志延(2018)“Relationship between intrinsic values and the use of cognitive strategies among Japanese college learners of English”,『千葉商大紀要』,第56巻,第1号,19-36.
- ④Sakai, S. K. Hisamura(2018)“Promoting Plurilingualism throughout Language Classrooms in Japan”,*Der Gemeinsame Europaeische Referenzrahmen Fuer Sprachen und seine Adaption im Hochschulkontext.* 209-222.
- ⑤成田潤也(2018)「小学校外国語教育の定義—小学校教師の授業創造力からの視点」,『言語教師教育』,第5巻,第1号,100-114.
- ⑥北野ゆき,松延亜紀,酒井志延(2018)「教科横断型授業を利用したローマ字指導」,『言語教師教育』,第5巻,第1号,130-145.
- ⑦阿部志乃(2018)「チョコレート・プロジェクトーチョコレートから世界の現実に目を向ける力を養成する外国語学習—」,雑誌名:Journal of Plurilingual and Multilingual Education No.5『複言語・他言語教育研究』日本外国語教育推進機構会誌第5号,pp.69-78.
- ⑧櫻本洋子(2017)「小学校外国語活動における効果的な児童のリテラシー指導」,『言語教師教育』,第4巻,第1号,59-68.
- ⑨成田潤也(2017)「小学生目線の実践と小学生目線でない実践」『言語教師教育』,第4巻,第1号,69-77.

〔学会発表〕(計10件)

- ①Shien Sakai (2019) “A New View on Foreign Language Education Using Machine Translation,” Educating the Global Citizen: International Perspectives on Foreign Language Teaching in the Digital Age, 3月26日, Ludwig-Maximilians-Universität, Munich, Germany.
- ②酒井志延・長谷川和代・竹田里香・松延亜紀(2018)「小学校教師の疑問に答える」,第42回関東甲信越英語教育学会栃木大会,8月20日,白鷗大学.
- ③竹田里香・酒井志延(2017)「感性を高める英語教育の必要性」第43回全国英語教育学会(JASELE),8月19日,島根研究大会,島根大学
- ④酒井志延(2017) “Relationships between Intrinsic Values and the use of Cognitive Strategies among Japanese College Learners of English,” 3月14日, 52nd RELC International Conference 2017
- ⑤酒井志延・久村研(2017) “Promoting Plurilingualism throughout Language Classrooms in East Asia” 2月25日, 6th Bremen Symposium, Germany.
- ⑥酒井志延(2017)「日本における複言語主義とCLIL」(招待講演)1月29日,外国語メディア学会九州支部,福岡大学.
- ⑦土屋佳雅里(2016)「「児童の異文化間能力を促す英語授業の検討 J-POSTL(言語教師のポートフォリオ)の記述文を中心に」,10月23日,第36回日本児童英語教育学会(JASTEC)秋季研究大会,大阪成蹊大学.
- ⑧酒井志延(2016)「複言語とCLILの普及」,(招待講演)9月26日,東京:中央教育研究所
- ⑨土屋佳雅里(2016)「外国語活動における【言語と文化に関する気付き】を深める指導—『Hi, friends! 2』の授業実践から—」8月21日,第42回全国英語教育学会(JASELE),獨協大学.
- ⑩Shien Sakai(2016) “Promoting Plurilingualism throughout Language Classrooms in East Asia,” 7月2日,(招待講演)The 14th ASIA TEFL International Conference, The Far Eastern Federal University. Vladivostok, Russia.

〔図書〕(計2件)

- ①酒井志延『“先生”のための小学校英語の知恵袋』(くろしお出版)2018年,248ページ
- ②酒井志延『小学校の英語授業をデザインする ワクワクした授業を目指して』(大修館書店)2019年,248ページ

〔産業財産権〕

- 出願状況(計 件)

名称:
 発明者:
 権利者:
 種類:
 番号:

出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
阿部 志乃，成田 潤也，土屋 佳雅里，北野 ゆき，長谷川 和代，行岡 七重，諸木 宏子，竹田里
香，松延 亜紀，樫本 洋子，安田 万里。

ローマ字氏名：

ABE Shino, NARITA Junya, TSUCHIYA Kagari, KITANO Yuki, HASEGAWA Kazuyo,
YUKIOKA Nanae, MOROKI Hiroko, TAKEDA Rika, MATSUNOBU Aki, KASHIMOTO
Hiroko, YASUDA Mari.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。